

特 72

16

賣品

足利尋常小學校新築意見書

301558-001-6

特72-16

足利尋常小學校新築意見書

長谷川 作七 / 刊

M24.6

BEA-0001

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

特ノ
16

足利尋常小學校新築意見



余は茲に足利尋常小學校々舎新築に關する鄙見を陳述して敢て足利町に
 欲するあり足利尋常小學校々舎改築の必要あり我足利町會は遠久數年前に於て之を
 認る來其設備不汲々たりと雖も昨明治廿三年度より到り町會に決議を以て今明治廿四年
 おは必之之れを新築することありたれば實に將來乃爲めお悦ばざるを得ざるあり然れ
 ども校舎を一より二に倍するに及ぶるに至ては素より熟議を要すべき問題なるを以
 て我足利町々長は町會に意見致すせんが爲め去月一日常務委員會と召集し之と諮問し
 りと雖衆員此問題と目して即答する能はざるものと爲し後日を俟つて之れを議せべしと
 せり然るも同十三日町長は再び之れを召集し前議を諮問せしむ多數は二校舎新築の決議
 とありしより是より於て又町長は本月一日臨時町會と召集し常務委員會に決議を準備する足
 利尋常小學校々舎建築費收支豫算案あるを乃を提出し町會亦之と討議せんとするに至り
 りと雖奈何せん原案調製は不完全ありと云ふに理由より依り修正委員を設きて之を修正
 せべしと決議し決し原案は目下修正委員に取調中ありと云ふに余は此問題に就ては一校舎

を設くるの議を採れり乃ちて二校舎を置くに賛せざるも乃ちと雖常務委員會の決議
 われ又奈何と難し將さみ他日を以て町會に本議起らんとほるに先たち平生に宿志を
 吐露し以て足利町に公論を委ふんと欲す是れ余の微衷實に已む能はざるあり
 二校論者曰く「二校を置久は生徒に通學に便ある一校に比ふならず」と是れ教育を尊重せ
 ざる儒夫の言にみ決して採るに足らざるあり足利町に面積非常な廣のりせば此言或と然
 らん然れども近村隣郷に面積を比するるときと決して廣とせざるあり論者又た知るから
 ん近村隣郷に尋常校生徒が其家門の校舎を隔るると里弱に遠きものも寒暑を凌ぐ風雨
 を冒し手袖相連ねて朝夕校舎に往還し刻苦勉勵し父兄亦も倦はしめざらんことを勤め
 處教育は發達しゆくあることな願ひて足利町に形勢を見よ仮令校舎何れに處ありとも
 るを街衢と櫛比を道路は砥平乃ち如く生徒に往還亦寂寥なるものも若し一校と
 せば生徒の通學と妨げ雨風を際して欠校の事恐れありとは余乃ち解する能はざる
 とて後なと論者の必竟現今教育の事情の暗きは勿論子女を愛するに道を知らざるをれと
 云はざるを得ざるなり

又曰「二校となさば何れの教師生徒も其雌雄を争ひんが爲めの間接に相互に教育と發達
 せしめるよし一校に比ふならず」と是を一理あるの如き乃ち議論ありと雖一を知て二を知
 らざるも乃ち抑も教育の競争は余乃ち希望する所をなと雖忌むべきは競争變して軋轢と
 なるもの血氣は教師幼少乃ち童女あるに校舎間を於て競争の結果一朝軋轢を生じるあら
 んか論者何れ面目あつて當町一般に見ゆるを得るか論者ホトく斯まで教育の競争を希
 圖して二校を主張はれれば余は聊の論者の一考に供する一策あり即ち當町適當の地を
 志す茲に校舎二棟を併設し校窓相對して教育に勉勵するに便を求むれば如何斯乃ち如くせ
 ば校舎離隔して相へ見ざれば憂もなく次で真正に競争起るを得ん論者果して首肯すると
 せば後や否や二校設置に理由として競争の利を解く蓋し誣辭と云ふべし
 又曰く「二校を新築するにせば一校と異なり義捐金を投するも多の能べし」と是亦空論
 乃ち試みに論者小問はん二校を建築するにせば幾何に捐金集まれば論者或は答ふ能は
 ざらん若論者も一歩譲り捐金多々集まるとも將來二校に要する教育費は如何熟ら
 足利町に富運を考ふるに機業は昔日と其情勢は一變し千歳未曾有の不景氣の慘況を演出

し足利町の財根は目下非常な衰頽し從來輸出の方針に向て其業務を傾けざるを以て如き
 と聊り利益は得るとあるべきありしをあらざると雖一般内地の需用と期せざるを以ては其損
 失を招かざるをの多にあらざるとや左りとて又一般は今日輸出の氣運に向て歩を進めたり
 と云ふもあらざれば當町乃未來も就て想像せば機業と益榮ふべしと云はんよりは寧ろ
 一層は退却と來にべしと想像はざるも敢て亦不可ならんか今や自治の制行はれ當町亦冗
 費節減の現狀に際し將來大に經濟上の組織を一新せざる可らざるも當り假令義捐金の
 ありざるが爲め校舍新築費は幾部分填補せらるゝと見るも將來も多分は教育費を要するこ
 とは考ふるときは論者は言實に危きと覺ゆるあり當り夫の之取らず近年は機業事情より
 考ふるときは年々町内乃戸數も許多の増減あるを以て假令時と去て生徒増加するもど
 りと雖分教室の如きもこれを設くべき可あり若しも未來は生徒の増加する所らんとて餘
 分は校舍を建築せるとは總て生徒の數減しふる所とさむ於て實に困却はる所外を考
 り深き戒めざるべからんや

余は以上二校論を辨難し盡しふる後以て之より足利町に尋常小學校を新築せんとせば一

校も若のざる理由を陳せん

第一 一校は足利町の經濟に利益あること

經濟の原則に所謂人は最少の忍苦を以て最多の結果を得んと欲するものありとは二校論
 一校論は何れが足利町に經濟に利益あるやを判断せざるも相當に標準取らんと信ぜ全く教
 育の美果を収めんと欲せば多分は教育費を費さんよりは少量の教育費を費さんと欲する
 は人類普通の希ふ所にして二校を置かんとは一校を置くの教育費の少量たるは知らば
 何人とも雖も異口同音の之れと賛成せざるは必然なり余は此の思慮に依て一校論を主張する
 を乃なり殊更に言を設けて之を唱道はるものあらざるなり今去る一日町長が臨時町會
 に向て提出せられたる建築費収支豫算案の如く二校に建築費金七千五百圓を要すると仮
 定し更にお又校舍敷地坪數及び其他の設計の諸費共お前と同一の割合を以て之に倍せると
 校舍を建築せるとせよ建築費として金七千五百圓を要して可きれば左は取らざると之
 より一割か若くは二割の減額を見るや必せり毎年度必要なる教育費にお於ても亦然し
 例へば二校の場合に於て教師十人を要するに於ても一校ありせば二校と同數の生徒より

て十人を要せし七人若くは八人にて教授となまよ不都合を感するが如きことなるべし。既に教師の員數減少せれば教師の俸給も亦從て減額すべし。若しの場合より教師教授の勞多しとあるとある。特に經濟の餘裕を以て之を勉勵せしめるの資を供するも可なり。番の教師の俸給のみならず他も又校費の減省するもの多く決して二校の比をあらざるなり。

第二 一校は足利町の教育發達に利益あると

小學校の要と兒童の普通教育を發達せしむるのみならず、雖教師は單に學術教授のみを以て任を全ふせると云ふを得る。不良の家訓を矯正し、身自ら言行の模範とあり、均一優渥な訓練をなすを以て、專要とあるべし。深思黙考して教育社會の現況を想像すれば、中央集權の餘習と共に一時吸集せられ、ある學問の地位は地方分權の發揚と共に其方向を轉じ、漸く地方も波及せられんとするが如し、嗚呼最も重きべしは自治の教育なり、最も慎まざるべからざるは其精神なり、自治の教育を發達せしめ、其方針を過まらざらざるべし。欲せば、風を小學校教育の要を失せざるべし。今日に教師たれば、昔日と異なり、傍ら生徒として自立の精神に富ましめ、生地を忘れざらしめ、一致團結の風を長せ、生れ生長の後は舊誼

追慕し、愛情を篤く養ひ、我々の念を惹起せしむるべし。と服膺するを必要とし、余曾て普佛戰後佛國小學校用讀本某編の「普魯西は我敵なり」との文あるを聞きて、宜なる哉。佛國の少年は氣概を富み、團結心を長せり。之を依て之を考ふるべきと。今日の生徒をして後來有爲の人才とせしめ、後日世人を去り、足利町の教育の結果は實に羨むべし。言を發せしめんとせば、可成と多數の生徒は一堂の中に集り、朝夕相親せしめ、相依らしめ、以て良師の教を則し、之を必要とし、其の效果豈に二校の比をあらんや。

第二 一校は足利町舊來の惡習を洗滌するに利益ありと

一校を設くるは二校を置くに殊あり。足利町は古來存在せし一の惡習慣を洗滌せしむるに利益あるべし。余は余に常に信じて疑はざる所なり。見よ足利町にありては舊來時々市場の地位に件あり。就き東西兩部町民間の商勢混亂せしとありし。よるを養ふや又兩毛鐵道停車場の地位に東西兩部町民間の間を於て争ひ爲れ、互に不快の感情を招きたることあり。之にあらざるや其他細末の事に到るまで東西兩部町の民間は互に快からざる。乃ち感情を懷いて、此感情を鼓動は、全町一般に利害の關係をなす事物に向て、其餘響が及ばざる事の善惡は、係はらざる。大抵其の破壊を見

としむるとありしにあらざるや實に是れ當町の一大欠点にして好案もあらば此の惡習慣を除去せんとて不絶當町識者の腦髓を苦しめたるは皆人乃知る處なり今若し當町に二校を設け過つて其の間に軋轢を生じ東西兩部乃町民間に不快の感情を惹起し遂に教育乃大本を過るが如し結果を生じるときは臍を噛むを亦及ばざる所ならん之より反て町内適宜に地を卜て一校舎を建設し一校堂の中を自治乃民衆養成せんとすまふ於ては一は當町東西兩部間の不和を念に洗滌するの感情を父老に胸裡に注入せしめ一は以て教育の將來を苦慮する所なきして已むに至らん蓋し當町一般の視力一校を注射し漸次之れが將來に向て利害を講究せしむるの觀念に基き不知不識の間を他に不快の感情を冷却するの傾向を生じざるべきばなり

足利町會は於て近時二校論者と一校論者とを論議起らんとするに臨み一片の微衷已む能はず聊の一校の利益ありて二校の不利ある所以を陳述し以て當町に公論を訴ふ當町乃識者教を吝まふと云くれば幸甚

明治廿四年五月

足利町々會議員 長谷川作七白す

明治廿四年六月廿三日印刷

明治廿四年六月廿四日出版

下野國足利郡足利町
大字足利百〇四番地

發行者

長谷川作七

下野國足利郡坂西村
大字五十部十番地

印刷者

堀越嘉一郎

